

卒業式式辞 2024年3月12日

「練られた品性が希望を生み出す」ローマ人への手紙5：1～5

恵泉女学園大学 学長 大日向雅美

皆様 ご卒業、おめでとうございます。ご家族・保証人の皆様にも、心からのお祝いを申し上げます。コロナ禍に置かれた厳しい時を乗り越えて本日を迎えられた皆様に、そして、それを支えられたご家族・保証人の皆様に、深い敬意を表したいと思います。

皆様の入学式は2020年9月でした。2020年は新型コロナウイルスの世界的感染の脅威で幕を開け、以後、未曾有の事態への対応に日本はもとより世界中が揺れていた時でした。皆様が学ばれる環境の安全整備に全学あげて取り組み、ようやく皆様をお迎えできた時の喜びは忘れられません。

お迎えできたとはいえ、数々の行動自粛を余儀なくされるなど、通常とは異なる不自由さが続くであろうこと、しかも、その不自由さを若い皆様が経験される理不尽さに胸痛む思いを禁じ得ませんでした。

学生生活が守られますよう、教職員一同、最善を尽くす覚悟で臨んだ入学式でしたが、皆様にはどうかいたずらに不安に流されず、状況を的確に見極め、冷静な判断に基づいて行動する「勇気」をもって、しなやかに凜として生きる力を磨いていただきたいと私は入学式の式辞で述べました。「勇気」は、換言すれば人間の知性と品性であり、それを恵泉女学園大学で育てていただくことを願いました。

以来、皆様のことをいつも見守らせていただいてまいりましたが、入学式の折の私ども教職員の願いを實に見事に体現してくださったことは本当に嬉しく、有難い思いであります。

皆様がこのキャンパスで修められた学びは、かならずやこれからの人生をたしかにする力となることを信じております。恵泉女学園大学の学びは、「聖書」「国際」「園芸」を礎として、学園創立者河井道先生が願われた世界平和に貢献する自立した女性となる学びです。河井先生の願いは時を超えて、今こそ次世代を生きる人に真に求められる力です。それを身につけていただくことが女子高等教育

機関である大学の使命と考え、「生涯就業力」として掲げてきたことを、ご卒業にあたって今一度、胸に刻んでいただきたいと思います。

「生涯就業力」とは、何があっても、どのようなときにも、自分らしく生きる目標を忘れないことです。ご自分の大切さを知る心をもって、共に生きる方、地域・社会に尽くすことに喜びを見出す力を生涯にわたって磨き続けることです。私たちは生きている限り想定外のことに出会います。もちろん苦難だけではありません。たくさんの喜びにも出会うことでしょう。苦楽を他の方と分かち合うことで、苦難は何分の一に、喜びは何倍にも、と願います。

先日、ある若い俳優さんのインタビューをテレビで視聴いたしました。誠実で真面目な役柄を演じて大変人気のある方で、私もファンなのですが、司会者から「あなたは役柄通りの人なのですか？欠点はないのですか？」と尋ねられて、彼はこう答えていました。「どんな役柄も自分の素地のうえに継ぎ足していくものですので」と、自身の素地はやはり何ごとにも真面目に取り組むタイプであることを認めた一方、「でも、僕は『まず自分』を考えてしまうことが多いのです。『自分を無にして』他の方に尽くすという謙虚さを持ちたいと思うけれど、それがなかなかできないことが欠点かもしれません」と。

なんと謙虚な、そして文字通り誠実で真面目な人柄なのだろうと感じ入りました。しかし、「自分を無にできないこと」を、しかもまだ 20 代前半の彼が悩む必要はまったくないとも思いました。

「他者を大切にする」という時に、少し誤解もあるのかもしれませんが。私もこれまで皆様に「生涯就業力」をお伝えする時に、「ご自分を大切に」という一方で、「他の方のために尽くす大切さ」を同等に述べてきたことをふりかえりました。

たしかに、この二つは等価ではありますが、順番は違います。とりわけ若い皆様には、まずご自分を大切にしてほしい、それが「生涯就業力」の基本であることを、改めてお伝えしたいと思います。

「自分を大切にすること」は他者を押しつけたり、ないがしろにしたりすることではありません。自分の大切さを知るからこそ、他者のかけがえのなさを知り、他者を尊重する心が芽生えるのです。そのためにも、ご自分をいかに、どのように守るかに心をとめていただきたいと思います。

「自分を大切」という言葉でよく連想されるのが「エゴ」「我欲」という言葉です。他者をないがしろにすることを連想させる言葉です。そうであるから「無我」つまり、「我・エゴを捨てろ」と言われるようです。

でも、それはなかなか難しいだけでなく不自然なことです。「エゴ」は生物としての生存本能でもあり、安易に捨てられるものではない、無理に捨てようとして捨てると思ひ込んですることで、自己欺瞞にも陥りやすいとも言われています。

つらいことがあった時、思い通りにならないことに遭遇して、もどかしさや怒り、時に人をねたむ気持ちが芽生えたとしても、それはだれもが持ちうる人としての弱さではないでしょうか。無理に捨てようとするのではなく、そういう境地に直面している自分を静かに見つめ、あるがままに認め受け入れることが大切だと言う説（田坂広志氏『教養を磨く』光文社新書 2023）がありますが、私はそちらに共感いたします。それこそが弱い私たちが持ちうる真の強さ、勇気だと思います。

自分の今をあるがままに受け入れ、静かに見つめる強さをもった時、やがて自分が置かれている場や時が視野に入ってくる。そうして未来を考える視点につながる時、共生の心で他者を大切にすることが自然にできたら望ましいと考えます。

どうすれば、そうした弱さを転じた真の強さ、勇気を持てるのでしょうか？

それはすでに皆様は身につけておられます。

この学び舎で過ごされた月日に思いを馳せてください。皆様の学生生活は例年とかなりかけ離れたものでした。授業の大半はしばらくオンラインで行われ、対面授業が復活できたと思った矢先に、コロナ禍が厳しさを増してまたオンラインに戻り、あるいはハイブリッド形式でと、落ち着かない異例の事態が続きました。例年行われていた行事やプログラムにも大きな制約が科せられ、海外留学やクラ

ブ活動、アルバイトもままならない日が続きました。そうした中であって、時にいら立ち、悲しい思いをされたことと思いますが、それでも皆様は粛々と現実を受け入れ、その時々にはできることに最善の力を尽くされました。コロナ禍でしか得られない気づきを大切にしようとする前向きな姿勢を貫き、卒業論文・卒業制作を達成され、就職活動にも挑戦されました。それがお出来になったのは、コロナ禍に必ず終わりがあることを信じる心を忘れなかったから、そうして、皆様を支えてくださっているご家族や友人、先輩、教職員への感謝の心を育まれていったことは、皆様が提出されたレポートや折々に直接交わさせていただいた言葉に感じとることができました。

どのような不測の事態にも、ひるむことなく勇気をもって日々を過ごしてほしいと入学式の式辞で申し上げたメッセージを覚えて、その実現に尽くしてくださった皆様に贈らせていただくのは、先ほどキリスト教教育主任の宇野緑先生がお読みくださった聖書の言葉「忍耐は練達を、練達は希望を生む」に他なりません。なお、練達とは「練られた品性」と訳している聖書もありますので、この式辞では「練られた品性が希望を生みだす」をタイトルとさせていただきました。入学式の式辞で、私は皆様に人間としての知性と品性である勇気をもって日々を過ごしていただきたいと願いましたが、それをたしかに受けとめてくださったことへの感謝の気持ちもこめてのことです。

皆様が信じた通り、コロナ禍も収束のきざしがみえてきています。そして、明日に向かって皆様は社会に羽ばたいていこうとしていらっしゃる。

皆様のこれからは希望に満ちて幸多いことを心から祈っております。

希望を生みだすもとなる忍耐は、これまでのコロナ禍の下、十二分に経験された皆様です。どうか自信をもって、このキャンパスで学ばれたことを胸に刻んでご活躍ください。恵泉女学園大学の灯が皆様を通して永遠に灯し続けられることを願って、本日の式辞をさせていただきます。

ご卒業、本当におめでとうございます。